

『伝法絵略記抄』断簡について

天 常 富 納

はじめに

文庫から発見された『伝法絵略記抄』断簡を紹介し、あわせてその資料的意義を考察してみたい。

一

鎌倉時代には祖師崇拝と教義宣揚のため、宗祖を中心に多くの伝記、とりわけ絵伝が作成された。それはいうまでもなく新仏教の成立、それにともなう教団の形成によるものであつた。伝記を絵によつて表現することは、秦致貞が延久元年（一〇六九）に画図した『聖徳太子絵伝』にはじまるとされる。鎌倉仏教においても後掲する法然絵伝をはじめとして、『本願寺聖人親鸞伝絵』（永仁三年一二九五 覚如宗昭撰）、『東征伝絵』（撰者未詳 永仁六年忍性が唐招提寺に施入）、『一遍聖絵』（正安元年一二九九 聖戒詞書 円伊画図）、『一遍上人行状絵』（真教授 掃部助入道心性・藤原有重画図 嘉元四年真教授が熊野本宮に奉納したといわれる）、『一遍上人絵詞伝』（宗俊⁽¹⁾などがあるが、その先駆をなしたのが『法然上人伝法絵流通』といってよからう。ここではその抄出で、新たに金沢

成し、教化に利用したからにほかならない。いまその主なものを伝記と絵伝にわけ掲げてみよう。

伝記

- | | | |
|-------------------|------|------|
| (1) 源空上人私日記 | 年代未詳 | 著者未詳 |
| (2) 法然上人伝記（醍醐本） | 年代未詳 | 著者未詳 |
| (3) 法然上人伝法絵（高田本） | 永仁四年 | 顕智書写 |
| (4) 法然上人伝記（九巻伝） | 年代未詳 | 著者未詳 |
| (5) 黒谷源空上人伝（十六門記） | 安貞元年 | 聖覚 |
| (6) 知恩伝 | 年代未詳 | 著者未詳 |
| (7) 法然上人伝（十巻伝） | 大永六年 | 智湛書写 |
| (8) 正源明義抄 | 年代未詳 | 著者未詳 |

このほか法然行状について記録したものに『知恩講私記』『古今著聞集』『私聚百因縁集』『明義進行集』『元亨釈書』「本朝高僧伝」などがある。

絵伝

- | | | |
|------------------|------------------|--------------------|
| (1) 法然上人伝法絵流通 | 嘉禎三年 | 駿空 |
| (2) 法然上人伝絵（増上寺本） | 九卷 ¹³ | 四卷 ¹⁰ |
| (3) 法然聖人絵（弘願本） | 正安三年 | 覺如宗昭 |
| (4) 法然上人伝法絵流通 | 九卷 ¹³ | 残欠一卷 ¹² |
| (5) 拾遺古徳伝絵詞 | 九卷 ¹³ | 二卷 ¹¹ |
| (6) 法然上人伝絵詞（琳阿本） | 九卷 ¹³ | 二卷 ¹¹ |

(7) 法然上人行状画図

徳治二年 舜昌 四十八卷¹⁴

(四十八巻伝)

なおこのほか掛幅装のものも数点知られている。

以上のように伝記八部、絵伝七部の多きを数えるが、『源空上人私日記』は法蓮房信空を、『醍醐本』は勢觀房源智を、『拾遺古徳伝絵詞』は親鸞を、『明義進行集』は長樂寺隆寛を、『十六門記』『知恩伝』『四十八巻伝』（『勅伝』）などは聖光房弁長を、それぞれ法然の正しい法嗣に位置づけようとしていることがわかる。¹⁵

二

ここで本論に直接関係があり、絵伝中最古とされる『法然上人伝法絵流通』について簡単に述べてみたい。原本は佚失しているが、『淨土宗全書』十七に収められている『本朝祖師伝記絵詞』は、つぎに示す四点からその転写本とすることができるので、これによりたい。

(1)『本朝祖師伝記絵詞』卷第三の内題が『伝法絵流通卷三』

とある。

- (2) 国華本の書名が『法然上人伝法絵流通』とある。
- (3) 高田専修寺本の書名が『法然上人伝法絵』とある。
- (4) 道光撰『聖光上人伝』に「建久九年^{私云上人時年三十有七}到豫州^{建光明寺}勸^{云弟子弁阿入室}道俗帰者如雲霞^{後遣予州而弘通念佛還鎮西}」

也」⁽¹⁶⁾とある。

『本朝祖師伝記絵詞』は四巻からなるので『四巻伝』とも略称する。巻第一に「いま先師上人、念佛すゝめ給える由來を、画図にしるす事しかり」⁽¹⁷⁾とあるように、法然誕生から父との死別、比叡登山、大原論義、四国配流、赦免、入滅、中陰法要、嘉禄の法難、小倉山建塔におよぶ一代記を、六十二段の和文（和漢混淆文体）による詞書と絵によつて記した絵伝記である。巻第二・四にはつぎのような本奥書がある。

（巻第二奥書）

嘉禎三年丁酉十一月廿五日筆功已畢。

此絵披見之人、奉レ礼ニ三尊之像、其詞説明之輩、読ニ誦大經之文、願ニ身口意之行、念ニ阿弥陀之名、往生極樂之志無レ武、勿レ疑レ之也。爰耽空執筆而草ニ旨趣、觀空和レ墨模ニ画図。願結ニ一仏淨土之縁、共証ニ九品蓮台之果、乃至無遮平等。敬白。耽空 在判

觀空 在判

おもひ入やすち等ゆみはりの月のつよくもひくかたそかし弓はりの月は大地を的としのおもひ入よりはつしけそなき⁽¹⁸⁾

（巻第四奥書）

嘉禎三年丁酉五月に始レ之、同十一月廿五日、於ニ相州鎌倉八幡宮本社之辺ニ画レ之。鎮西筑前國之住人左兵衛尉源光忠^{（法名觀空）}云々。願主沙門耽空六十九

人ことにおしむけしきやみえぬらん山のこゝろにはれぬ月かげ月をなをもとのすみかにやどせかしいでしも山のかげならぬかは

わきたれも往生際にうせにける阿弥陀仏をとかりやにして抑この絵は、ふかき心ざしあり。特留此經の傍に為レ挿ニ先師之遺徳、止住百歳の間、欲レ備ニ後代之美談者也。然則往日駅路之斗藪、翻為ニ界道林池之經行。今上子城之宣命者、宜レ待ニ大閣講堂之法輪ニ矣。者往生極樂之類將レ得ニ天眼天耳他心智、欣求淨土衆、盍レ照ニ人界人身願樂思ニ也。知見無レ誤者、早出ニ有為之家、本誓有レ憑速入ニ無為宮^{（云々）} 般空在判⁽¹⁹⁾

この奥書から本書は法然の弟子耽空六十九歳が、読む者をして淨土往生させんため、鎌倉八幡宮本社の辺で、嘉禎三年（一二三七、法然滅後二十五年）正月廿五日から十一月廿五日まで十ヶ月間で完成したことがわかる。

願主であり著者でもある耽空については、法然を「先師上人」と呼称しているのみならず、法然の三七日仏事にも

三七日御導師 住信房

弥勒菩薩

末弟耽空⁽²¹⁾法師捧ニ誦經物、唐朝の王羲之摺本一紙面十二行八十余字書之

にしヘ義之べきみちのしるべせよむかしもとりのあとはありけり
安息國之⁽²²⁾鳥故云々

とあり、法然にとつては親しい門弟の一人であつたことが推察される。しかし「七箇条制誠」「法水分流記」「淨土源流章」その他の資料にその名をみることができない。ただ「源

『空上人私日記』にはみることのできない嵯峨釈迦堂について『本朝祖師伝記絵詞』は触れているから、耽空は嵯峨の地と関係があつたかも知れない。また耽空は二尊院に住した嵯峨門徒の祖、正信房湛空ともされているが、湛空⁽³²⁾は建長七年（一二五三）、七十八歳で没しているので、嘉禎三年は六十二歳であり、六十九歳とする本書の著者耽空とは別人としなければなるまい。

また絵師の左兵衛尉源光忠、法名観空については明らかでない。しかし画図するにあたり、卷第二の奥書に「爰耽空執筆而草ニ旨趣、觀空和レ墨模ニ画図」とあり、卷第四の尾に「新発意の沙門、有縁のもよほすところ、互に言語をまじへ、共に画図の思案をめぐらして」⁽²⁴⁾ および卷第四奥書に「抑この

絵は、ふかき心ざしもあり」とあることから、観空が画図するにあたっては耽空と綿密に協議していることがわかる。また卷第二の奥書に「此絵披見之人、奉レ礼ニ三尊之像、其詞説明之輩、読ニ誦大經之文」とあるのは、絵解き法師の存在を予想させるものといってよからう。

なお菊地良一氏は卷第二と卷第四に奥書があることについて、最初は二巻をもつて完結の予定であったが、三・四巻が追補されたこと、前二巻は源空の史的事蹟を記した正編、後二巻は顯密諸宗との宗論、および源空の配流と念佛信仰の徳行功德を記した後編とみることができるとしている。

このような『本朝祖師伝記絵詞』・『法然上人伝法絵流通』は、法然滅後四年まで遡及できる『源空上人私日記』の影響下に成立したとされ⁽²⁶⁾、また法然に親しく随侍した耽空が、法然滅後二十五年に著わしたものであるから、法然伝記としては信憑性が非常に高いといわなければならぬ。また願主・執筆者・作成年月日・場所・旨趣など、その成立事情が具体的に判明しているとともに、その後に成立した絵伝類に大きな影響を与えたことから、日本絵巻物史上重要な資料とされているが、宗教的にも当時の鎌倉における法然流淨土教伝播の一側面を語るものとして無視できない。

三

『伝法絵略記抄』断簡一紙は、その後に合綴されている『末法燈明記』・『大唐西域記』抄出一紙とともに、廃忘に備えて記録されたもの。覚書の一部であつたと思われる。袋綴装で縦30・5cm、横24cm、二紙からなる断簡であるが、その料紙や書体から鎌倉期の写本であることは間違いない。あるいは後で触れるように延応元年に書かれたものかも知れない。いまその全文を紹介するが、『伝法絵略記抄』については『法然上人伝法絵流通』（『本朝祖師伝記絵詞』）と対比して掲げることにする。なお尾部の靈験奇瑞について『伝法絵略記抄』は、「暗夜經論見給^ヲ、燈明ナケレトモ室内照事」 「花嚴

経披覧之時、青龍守護事」の順であるが、『本朝祖師伝記絵詞』と対比の都合から、資料に違背し「花巻経披覧時、青龍守護事」を前に置いた。また『本朝祖師伝記絵詞』抽出部分

の各末尾に示した括弧内の数字などは、『淨土宗全書』十七の頁・段を示す。

本朝祖師伝記絵詞卷第一

伝法繪略記沙

(前略)

如来滅後二千八十二年、日本国人皇七十五代崇徳院長承二年
癸未作國久米押領使漆間朝臣時國一子生ずるところ。(53・下)

(中略)

保延七年辛酉はるのころ、時国朝臣、夜打にあへる刻、ふかき
きずをかふむりて、いまはかぎりになりにければ、九歳なる
子に、われは、此きずにて、空くみまかりなんとす。(54・下)

(中略)

生年九歳なる子息、敵人の頭に、少箭をいたてける。葬送中
隠の間、念佛報恩ををくる刻、雁塔をたてゝ、鳴鐘をなら
し、烏瑟の妙相をあらはして、鷲嶺の真文を開題し、鷲子が
智弁をむかへて、鳥方にをくらん事をのぞむ。同年のくれ、
同国のうち、菩提寺の院主觀覺得業の弟子になり給。

(55・上／下)

(中略)

初登山の時、ひさしの得業觀覺の状云。

進上

『伝法繪略記抄』断簡について(納富)

九歳_{ニシテ}敵人目シリヲイ給、
菩提寺院主觀覺得業の弟子ナル、生年九才冬欽、或云美作國
智鏡房_{ニタ}

天養二年乙登比叡山、觀覺得業之書状云、
進上、

大聖文殊之像一体

天養二年乙丑月日 観覚上

西塔北谷持法房_{禪下}_{源光}

この消息を披閱して、文殊像を相尋の処、生年十三の少人許をさきにたてゝ登。仍奇異の思に住して後、一文をさづくるに、十文をさとる次第、まことにただ人にあらず。

法花修業の候。

久安三年丁仲冬、出家受戒。云々竊以、無明長夜以戒光而為炬、滅後軌範以木叉而為師。故受生昇沈依戒持毀見佛有無任乘緩急。所以離雲不覓雨、避池不尋蓮。叶_ニ仏位_ニ計無離道心、取菩提芸有勤善根。其志を以、肥後阿闍梨皇円に從て、天台六十卷読畢之。件闍梨、弥勒下生の曉をまたんがために、五十六億七千萬歳の間、遠江国笠原池に、大蛇となりてすまふべきよし、彼領家に申請て、誓にまかせて、死後即その池にすまふよし、時の人、遠近、見知するところ也。

大聖文殊之像一軀、

西塔北谷持法房_{禪下}進上如件、

此消息披閱、文殊像相尋之処、生年十三なる少人許をサキニタテ、登山、仍奇異思住後、文ヲシフルニ、一聞十サトル次第、実只人アラス、

久安三年丁仲冬、鬢髮下、

同年阿闍梨皇圓隨天竺宗學給、

彼人成大龍、住笠原池

久安六年庚午生年十八、はじめて黒谷上人禪室に尋いたる、同上人いでむかうて、発心の由來を問給ふに、親父夜打のために早世せしより、この遺詞にまかせて、遁世のよし思たちける次第つぶさにかきくどき給ければ、さては法然具足の人こそましますなれと侍しより、法然といふ名は、のたまひける。

久安六年壬申生年十八、西塔黒谷上人禪室尋至之日、上人出向、発心由來尋給、親父夜打タメニ世ハヤクセシヨリ、其遺詞任、遁世之由思立スル旨委_{ツフサニ}カキクトキ給_{ケレハ}、サテハ法然具足、ヒシリニコソハマシマンけれと侍しより、法然云名エ給り、或云從十六歳至十八歳、首尾三年之間、同時三人ノ師トリテ天台六十

花嚴經披覽の時、あやしげなるくちなは、いできたるを見て、同信空上人、これをおそれ給ひける夜の夢に、我はこれ上人守護為、青龍現するなり。更におぢられたまふべからずと。云々

暗夜に經論を見給に、灯明なけれども、屋内をてらすひのごとし、信空上人、同その光を見る。

保元々年_{丙子}求法のために修行すとて、先嵯峨に參籠。然後、南都贈僧正藏順に法相宗を学し給ふに、其の義甚妙にして、不可思議なりければ、師範かへて、上人に帰して、仏陀と称して、供養をのべ給。 (56・下) (58・上)

(後略)

卷キハム云々

一花嚴經披覽之時、青龍守護事、信空上人同見給黒谷

一暗夜經論見給、燈明ナケレトモ室内照事、
信空上人ミ給、黒谷禪室

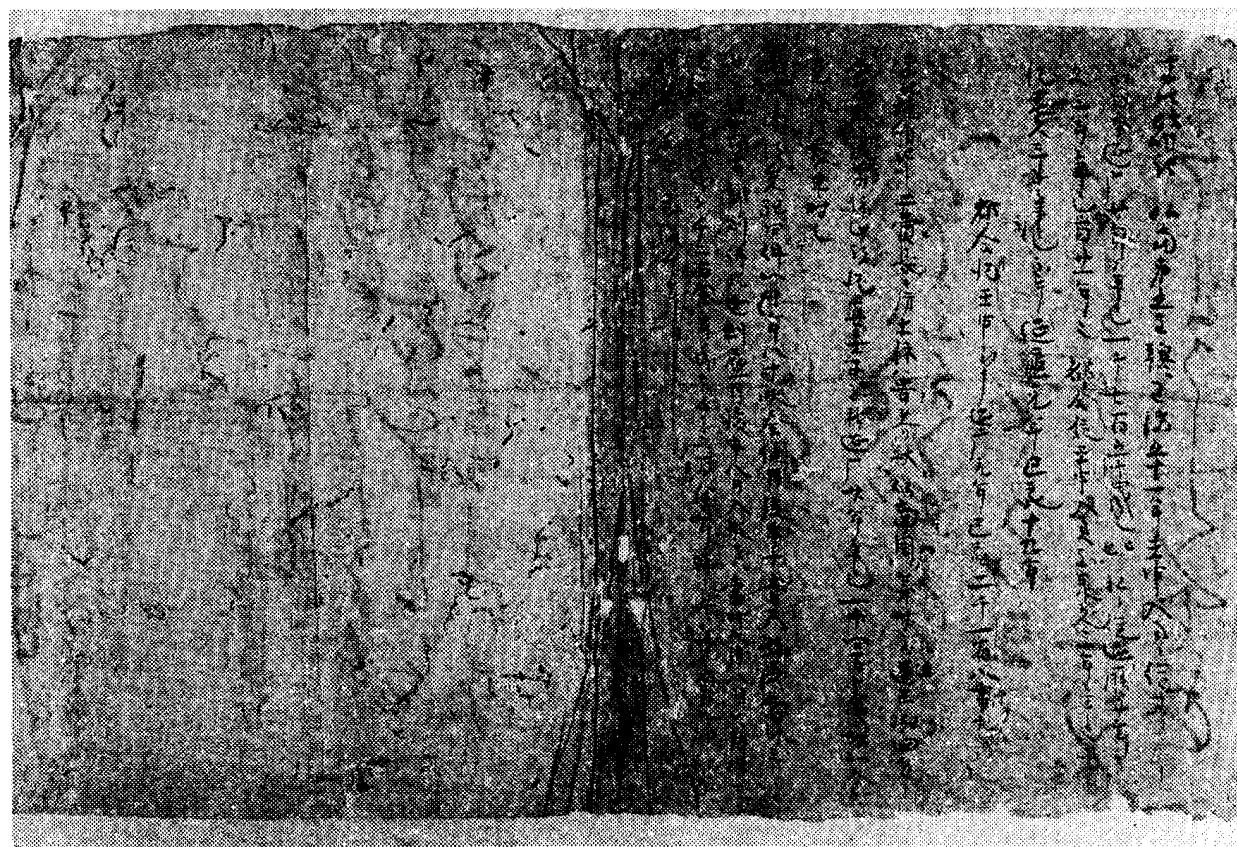
一般若經披覽之時、文殊師利示現給、同處
一法花經披覽之時、普賢大士降臨之給同處

一贈僧正藏俊隋法相宗學給、述私所解、
還歸弟子宣

末法燈明記云仏當第五主穆王滿五十一年壬申入滅。從其□^(壬申)
至日本延暦廿年辛巳。一千七百五十歲也。⁽²⁷⁾ 上私云從延暦廿年至□^(承)
久三年巳四百廿一年也。都合從壬申入滅至承久三年辛巳二千百七十年也
從承久三年辛巳至于延應元年己亥十九年

都合從壬申至于延應元年己亥二千一百八十九歲也

末法燈明記云二費長房等依魯春秋。仏當周第廿主匡王班四年



壬子入滅。若依此說。從其壬子至我延曆廿年辛巳。一千四百十歲。故知今時
是像法最末時也。⁽²⁸⁾

西域等云聞諸先記曰。仏以生年八十吠舍佢月後半十五日入般涅槃。當此三月十五
日也。說一切有部。則仏以迦刺底月後半八日入般涅槃。當此九月八日也。自仏涅槃

諸部異議。或云千二百余年。或云千三百余年。或云千五百余年。或云⁽²⁹⁾□

□九百余年未滿千年。⁽³⁰⁾

四

まず『伝法絵略記抄』は『本朝祖師伝記絵詞』と比較した場合、大部分は符合するが、わずかに出入りがある部分や、

まったくみることのできない部分がある。いま著しく異ったところを二つ取りあげてみよう。

一つは明石定明夜討の部分で、『伝法絵略記抄』には「敵人目シリヲイ給」とあるのに對し、『本朝祖師伝記絵詞』は「敵人の頭に少箭をいたてける」とあるように、矢があたつたところが前者は「目シリ」とし、後者は「頭」としている。⁽³⁰⁾他の一つは法然の行業において顯現する靈驗奇瑞である。『伝法絵略記抄』は「暗夜に室内を照す事」「花巖経披覽時青龍守護事」「般若経披覽時文殊示現事」「法花経披覽時普賢大士降臨事」「藏俊僧都師事事」の五種をあげているが、『本朝祖師伝記絵詞』は「花巖披覽時青龍出現事」「暗夜放光事」「藏俊僧都師事事」の

三種があるのみで、順序も異なっている。これらの相違点は輕々にはいえないが、『本朝祖師伝記絵詞』が転写の間に刪補されたらしいから、嘉禎の原本『法然上人伝法絵流通』を探る手がかりになるものかも知れない。⁽³¹⁾

また「生年九才冬歟」「或云美作国智鏡房云々」「或云從十六歳至十八歳、首尾三年之間、同時三人師トリテ天台六十巻キハム云々」の部分は、あるいは筆者が他の文献により考証したものであろうか。

つぎに『末法燈明記』『大唐西域記』の抄出からなる一紙は、『伝法絵略記抄』のつぎに合綴されているが、その關係は明らかでない。ただ末法思想は法然における宗教形成の一つの基準になるものであつたばかりか、『黒谷上人語燈錄』卷第十四(『和語燈錄』四)所収の「十二問答」に「末法ノ中ニハ。持戒モナク破戒モナシ。タタ名字ノ比丘ハカリアリト。伝教大師ノ末法燈明記ニカキ給ヘルウヘニハ、ナニト持戒破

戒ノ沙汰ヲバスベキソ。」⁽³⁴⁾と『末法燈明記』を引文していることを考へると、両者は関係あるものとみてよからう。また『末法燈明記』抄出中に「從承久三年辛巳至于延應元年己亥十九年都合從壬申至于延應元年己亥二千一百八十九歲也」⁽³⁵⁾とあるが、これは本抄出が延應元年(一一三九)に書かれたことを意味するものとなすことができる。それは『教行信証』卷第六(化身土巻)に「勘ニ如來般涅槃時代。當ニ周第五主穆王五十三歳也」⁽³⁶⁾とある元仁元年(一一三四)が、『教行信証』撰述時期決定の有力な根拠とされていることからも納得されよう。

このように『末法燈明記』『大唐西域記』の抄出が延應元年であることは、その前に合綴され、かつ思想的にも関係があると思われる『伝法絵略記抄』も、延應元年に書かれたものとすることができる。もしそうだとすれば『伝法絵略記抄』は、『伝法絵流通』が成立してからわずか二年後に記録されたことになる。

む す び

以上『伝法絵略記抄』断簡の紹介とあわせて『法然上人伝法絵流通』にも簡単に言及した。鎌倉における法然流淨土教は、正治二年(一一〇〇)安樂房遵西の鎌倉遊化を嚆矢とし、元久元年(一一〇四)には伊豆山源延も法然から『淨土宗略要

文』をうけ、専修念佛者となつてゐるが、本格的な展開は隆寛や証空・長西・聖光の門流の進出まで待たなければならぬ。しかし耽空が『法然上人伝法絵流通』を著わした嘉禎三年以前、鎌倉における活躍が明らかに知られてゐるのは、安樂・源延以外、わずかに嘉祿の法難(嘉祿三年一二二七)により配流された隆寛と、その門流智慶・円満らにすぎない。またそればかりか彼等の具体的な行動や貢献についても余りはつきりしていない。このような動向にあり、最古の法然絵伝を撰した耽空の功績は高く評価しなければならないが、この絵伝がある意味では鎌倉における法然流淨土教展開の原動力となつたことも間違いない。⁽³⁸⁾またわずか二年後の延應元年に書かれている『伝法絵略記抄』断簡は、嘉祿の原本『法然上人伝法絵流通』を探る手がかりとなるばかりか、その流布を証する重要な資料といわなければならない。

(1) 注

原本は失われてゐるが、京都四条金蓮寺本には徳治二年の奥書があり、神戸神光寺本には元亨三年の奥書がある。

(2) 親鸞の書写になる『西方指南抄』にある。成立は嘉祿の法難(嘉祿元年一二二七)以前と推定され、最古の法然伝とされる。信空がしばしば登場するから、著者は信空系ともされが、天台系の人とも推定されている。

(3) 内題は『法然上人伝記附一期物語』とある。奥書に「法然上人伝記依及覽雖為枝葉書之 義演」とあり、義演三后(一五

五八一一六三六) が書写したもの。六篇からなるが「三心祈

簡事」「別伝記」の二篇を除き、『拾遺語燈錄』『西方指南抄』

『和語燈錄』にある。また最初の「一期物語」の首部に「見

聞書勢觀房」とある。

(4)

下巻のみで絵を欠き詞書だけである。また善導寺本の『伝法

絵流通』(『本朝祖師伝記絵詞』)とは同一系統とされるが、

文句の異同多し。奥書に「草本云永仁四年十一月十六日云々。

永仁四年申十二月下旬^第書写之」とある。

(5)

『法然上人絵詞』卷第一(残欠)と『法然上人伝記』九巻を合したものとされる。『法然上人絵詞』の序に「今上人の遷化、

すでに一百歳におよべり」とあるから、成立年代は正和元年(一三一二)ころとされる。また「一宗の安心を全くせん

ために、親鸞を幸西の弟子とするのみならず、幸西の一念義

を「惡義邪見」、親鸞の一門を「癡闇の輩、誑惑の類」と非難

して、鎮西義の正統性を主張している。なお三谷光順氏「念佛往生伝に就て」(『専修学報』二号所収)によると、金沢文

庫本『念佛往生伝』の禅勝房や尼妙真の条が『九巻伝』卷第

四下の「禅勝房事」「尼妙真往生事」と関係があるとする。

(6)

大屋徳城氏「十六門記の真偽を論ず」(『日本佛教史の研究』

第三巻所収)によると、後世に成立した『四十八巻伝』や

『長西録』に何等解れていないことなどから偽書とされてい

る。

(7)

跋に「今先師上人入滅之後僅歴七十余廻之星霜、當世奉
レ値^レ上人之輩已以希也」とあるが、これは原伝のものとし

なければならない。田村円澄氏『法然上人伝の研究』によれば、『知恩伝』は『十巻伝』とともに、同一原伝を骨子として編纂または抄出したものとする。

卷第一の奥書に「大永六年丙戌二月十四日厭欣智灘判、彼伝記

(8) 一部十巻令成就畢」とある。

『拾遺古徳伝』などによっているから、撰者は親鸞門流に關係

があるものと思われる。

(10) 築後善導寺蔵、南北朝期の書写とされる。その奥書の最後に

「永仁二年甲午九月十三日書畢 執筆沙門寛惠^{満七十雖^モ手振目}

闇^ハ為^シ結縁^シ所^ニ之^ノ書^ヲ也。後見念佛申可訪給。南無阿弥陀仏々々」とある。

(11) 絵が『四十八巻伝』と類似しているといわれる。

(12) 堂本家本と知恩院本がある。

(13) 奥書に「于時正安第三辛丑歲從^ニ黃鐘中旬九日、至^ニ大呂上旬五

日^ニ首尾十七箇日、扶^レ瘡忍^レ眼草^レ之。縡既卒爾^{ナリ}、短慮転迷惑、

紕繆胡靡^ハ斯^フ、俯^{シテ}乞^フ、披覽之宏才要加^ニ取捨之秀逸^ニ耳、衡門

隱倫积覚如三十二歳」とある。茨城常福寺蔵元亨三年正空

本、坂東報恩寺蔵永仁三年覺如自筆本、高田専修寺蔵永仁三年

年覺如自筆本、東本願寺蔵康永二年覺如自筆本などがある。

知恩院本(国宝)と当麻奥院本がある。

田村円澄氏『法然上人伝の研究』一〇〇頁参照。『淨土宗大辭典』は『法然上人伝法絵流通』は信空の法系を尊重している

とし、これも『四十八巻伝』作成の一因としている。

(14) 『淨土宗全書』一七・三八三・下参照。なお「遣^ニ豫州^ニ」と

あるのは『本朝祖師伝記絵詞』卷第二では「遣^ニ伊州^ニ」とな

っている。(『淨土宗全書』一七・六四・上参照。)

(15) 『淨土宗全書』一七・五三・下参照。

(16) 『淨土宗全書』一七・八三・上^ニ下参照。

(17) 卷第四の奥書に「五月に始^レ之」とあるが、卷第一に「いま

先師上人、念佛す^ムめ給える由來を、画図にしるす事しか

り。于時嘉禎三年丁正月廿五日、沙門耽空記^レ之」とある。「五

と「正」の草書体は非常に類似しているから、いざれかが誤

写したのではなかろうか。

(21) 耽空は耽空の誤写か。

(22) 『浄土宗全書』一七・七七・下参照。
 湛空は(一一七六一一二五三)左大臣徳大寺実能の孫、初め叡山に登り、顕密二教を学んだが、後法然に師事し専修念佛となる。建永二年(一二〇七)法然が讃岐に配流された時随侍した。また円頓戒を相承したので、土御門・後嵯峨両上皇や法華寺の比丘尼などに菩薩戒を受けた。貞永二年(一二三三)西山粟生野から法然の遺骸を二尊院に移し、小倉山に雁塔を建てて安置した。『本朝高僧伝』卷第十五に「湛空伝」あり。

(23) 『浄土宗全書』一七・八三・上参照。
 中世説話の研究二二二三頁参照。

(24) 『浄土宗全書』一七・八三・上参照。

(25) 『中世説話の研究』二二二三頁参照。

(26) 田村円澄氏『法然上人伝の研究』参照。

(27) 『日本大藏經』「天台宗顯教章疏」二一・一二四・上参照。

(28) 『大正新修大藏經』五一・九〇三・中参照。

(29) 矢のあたったところを『源空上人私日記』『十六門記』『拾遺古德伝絵詞』『四十八巻伝』は「日のあひだ」、『十巻伝』『知恩伝』は「貪瞋二日間」、『弘願本』は「まゆのあひだ」、

『琳阿本』は「つら」、『正源明義抄』は「ひだりのまなこ」としている。何故このような相違が発生したか明らかでない。今後の研究に俟ちたい。

(31) 『本朝祖師伝記絵詞』では『伝法絵略記抄』と対応しない後

の部分で、「善導來現」「勢至出現」「三尊出現」などの奇瑞を掲げている。因みに諸伝記における奇瑞靈験について掲げてみるとつぎのとおりである。なお(1)暗夜放光(2)花嚴経披覽時(3)法華三昧(4)真言五相成身(5)蔵俊師事(6)寬雅(華嚴)師事(7)慶賀(三論)師事(8)念佛時勢至出現とし、数字によつて示すことにする。

(32) 『源空上人私日記』(3)(2)(1)(4)『法然上人伝記』(九巻伝)(3)(4)(1)(2)(5)『黒谷源空上人伝』(十六門記)(1)(2)(3)(6)(5)『知恩伝』(3)(2)『法然上人伝』(十巻伝)(3)(4)(2)『正源明義抄』(5)

(33) 『本朝祖師伝記絵詞』は「同年のくれ」「観覺得業」「肥後阿闍梨円に從て天台六十巻読畢之」とある。因みに諸伝記についてみると、つぎのとおりである。なお(1)出家の時期(九才の冬)(2)智鏡房(3)六十巻を究むとし、数字によつて示すことにする。

『源空上人私日記』なし。『法然上人伝記(醍醐本)(3)『法然上人伝記』(九巻伝)(3)『黒谷源空上人伝』(十六門記)(1)(2)(3)『法然上人伝』(十巻伝)(1)(2)(3)『法然聖人絵』(弘願本)(2)『拾遺古德伝絵詞』(1)(2)(3)『法然上人伝絵詞』(琳阿本)(3)『大正新修大藏經』八三・一二三・上参照。

『大正新修大藏經』八三・一二三・中参照。
 承久三年(一二二一)は法然没年から十年目に相当するが、何故この年を基準にしたか不明である。後日の研究に俟ちたい。

(34) 『大正新修大藏經』八三・一二三・中参照。
 撰述時については諸説がある。『高田正統伝』卷五に「五十二歳、即ち元仁元年甲申正月十五日より稻田に於て教行信証を書き揃えたまふ」とあり、また『坂東本』(報恩寺伝來東本願寺藏)の存在から、元仁元年を根拠として、起草説、脱稿説、帰洛改訂説があるほか、信卷別撰説もある。

田村円澄氏『法然上人伝の研究』二五頁によると『法然上人伝法絵流通』には自派(たとえば鎮西派など)の正統性を主張する態度はないとされるが、それより十八・九年後に成立

した金沢文庫本『觀經疏聞書』には「薩生房」「覺明房」「住心房」「西山」「一念」などの教義的なちがいが挙げられて、いるのみならず、良忠が正元二年（一二六〇）前後に、千葉から鎌倉へ移住した時、鎌倉大仏勸進聖淨光をのぞき鎌倉の法然流念佛者—智慶・道教ら—と何等交渉をもっていな、ことは、当時鎌倉では門派間の抗争が顕在化する程發展していったことを示すものである。